論説

豊国における仏教伝来と八幡神の諸問題

國學院大學大学院博士後期課程
有働智奘

はじめに

わが国の太古の宗教（以下「原始神道」とする）[1]と仏教の関わりについての先行研究は、あまりにも多くあり枚挙に遑がない。[2]しかしながら、豊国（宇佐）への仏教伝来と八幡神との関係について検討した研究は少なく、西田長男氏、中野幡能氏、田村圓澄氏、逵日出典氏、高橋庄次氏、青龍宗二氏、大和岩雄氏、菅原信海氏が挙げられる。

その中で、西田氏は、『日本書紀』の「法師君」「豊国法師」の記述に注目し、百済武寧王の孫である「法師君」の「法師」という二字は明らかに仏教語であるとして、武列天皇七年乙酉（五〇五）にわが国へ仏教が伝来した可能性を指摘した。また「豊国」という記述から、用明天皇の御世に或る一派の仏教が豊前、豊後に繁栄していた可能性を指摘した。[3]中野氏は、同じく『日本書紀』の記述から「豊国奇巫」「豊国法師」を検討し、少なくとも五、六世紀の頃豊国においては氏族の司祭者と原始神道と仏教が融合し、宇佐仏教が新羅仏教であることが明らかであると論じている。[4]田村氏は、六世紀前半に九州北部の筑紫、火国、豊国の三国を支配していた筑紫の磐井が新羅と外交関係にあったことを指摘し、新羅と豊国との交流は五世紀以来続いていたとして、その頃に新羅文化が豊国に伝えられたと述べている。[5]逵氏も田村氏と同じく八幡神の源流は新羅系渡来人が信仰していた新羅神が道教と仏教を融合したものであると述べ、豊前地域では「ヤハタ」神として祀られて

いたと述べている。[6] 高橋氏は、豊前国は百済系の秦氏族集団の本拠であり、八幡神はもともと百済仏教と深い関係をもっていたと論じている。[7] 青龍氏は豊国の仏教伝来の年次を確定することは不可能であるが、新羅人の移入と新羅仏教の受容が明らかであり、豊国に仏教が移植されたのは六世紀初頭と考察している。[8] 大和氏は五来重氏が筑豊の彦山に入った仏教を「新羅仏教」と限定せず、朝鮮仏教としていることに対し、中野氏の新羅仏教説を強調している。[9] 菅原信海氏は、田村氏や松前健氏の説を受けて九州における神仏習合は仏教公伝以前からあり、新羅仏教を支持している。[10]

このように豊国への仏教伝来についての先行研究では、西田氏と高橋氏は百済仏教の影響を検討しているが、他のほとんどが中野氏、田村氏、逵氏の説である新羅仏教との関係を主張し、未だ見解が分かれたままである。そこで本稿では、豊国における仏教伝来と渡来人との関連から再検討をし、八幡信仰が興起した宇佐を中心とする北部九州、筑豊地域の仏教伝来と神仏習合の二つの経緯の視点から諸問題を論じたい。

一、八幡神と仏教の対面

八幡神の信仰の本質を探ることは淵源論として疑問を抱く点も指摘されるが、[11] その成立を検討するために、渡来人の八幡信仰と仏教の関わりの起因を考察したい。

八幡神は、一般的に別名「誉田別尊」所謂、「応神天皇」と伝えられている。単純に考えると応神天皇が仏教に入信したことになり、「菩薩」の名号を八世紀に奉授することになる。なぜ八幡神が応神天皇と伝えられることになったのであろうか。この問題については宮地直一氏、中野氏、逵氏等が指摘している。[12] 三氏とも仏教伝来の視点から関連して考察はされていない。そこで、応神天皇在位期と考えられる四、五世紀ごろにおいて、東アジアの仏教流布の状況を併せて八幡神の応神天皇付与を検討すると、八幡神が仏教を受容する契機があると考えている。

応神天皇在位期に仏教が私的伝来をしていた可能性は、すでに井上薫氏が指摘しているが、その立証には至っていない。[13]当時を検討すること自体が資料不足であるため実証が難しい。つまり、応神天皇在世のころに大陸から多くの文物が招来されたことは、『日本書紀』『古事記』の記述や考古遺物から知ることが出来るが、それらによって仏教の伝来は確定できない。また、中国、朝鮮の書物において倭国へ仏教が伝えられた記述は『隋書』東夷伝百済条の記述以前には見られない。

しかし、歴代天皇の文化面についての外交政策を『古事記』『日本書紀』から見ると、最初に「開国」のような政策を行い、多くの渡来人とその文物を受け入れ、日本に帰化させたのは応神天皇である。また、応神朝以降の四、五世紀には中国へ倭国が使者を派遣している。そこでこの頃の中国仏教と比較してみる。

中国においての仏教伝来説は八点伝えられ、[14]その中で一般的な説は、後漢明帝永平十年（六七）に迦葉摩騰、竺法蘭が伝えた白馬寺伝説縁起である。この説からすると倭の奴国が後漢の光武帝に使者を送った時点で日本への仏教伝来はありえない。卑弥呼が使者を送った時期に魏では『無量寿経』が訳されていた。そのことから邪馬台国の頃には私的伝来もあり得る。この点については田村氏も指摘しているが、具体的な論証はされていない。[15]そこで、邪馬台国の時期の仏教伝来を再度考察してみよう。

はじめに、この時代の中国国内では近隣の諸外国に対して強い仏教伝道活動はみられない。また『無量寿経』が訳されていたにもかかわらず、その経典の主体である阿弥陀信仰の形跡が不明瞭であり、当時の中国人が仏教教理をどの程度理解して信仰していたかは明らかでない。それは、仏像に仏名付与（阿弥陀、観音等）の形跡や、単独の礼拝像として存在する例が四世紀以前は皆無である。[16]

つぎに、邪馬台国の人々が持つ中国文化に対する受容能力も問題となる。仏教が伝来した当初の中国では神仙思想と融合して「仏」を「神」として祀っており、中国南方では仏像を用いた揺銭樹、魂瓶、銅鏡、鉢などが出土している。[17]四世紀以前では独自の中華思想を形成していた中国人たちに仏教の印度哲学的思想部分の理解を得るため『理惑論』などの格義仏教の解釈

が研究されている。このことは中国人の仏教思想の浸透の難しさの表れであろう。つまり、中国人でも仏教の理解が不十分である状況にもかかわらず、初めて漢字文化と接触した邪馬台国の使者が、中国文化の受容も不十分な状態で、さらに難解な仏教哲学を理解できたとは考えられない。

そして、三、四世紀の日本の古墳からは中国南朝方面で発見される「三角縁仏獣鏡」（以下、「仏獣鏡」とする）等が出土している点を仏教伝来したといえるかどうかの問題である。井上氏は「鏡の輸入や国内での模造は鏡それ自体の所有を目的とし、文様に関心をもったらしくないから、これらの鏡によって仏教伝来を明言するわけにいかない」と述べている。[18] この指摘については、当時の人間が文様に関心がないとはいえず、先に述べたように仏を神として信仰していた可能性もある。むしろ、「仏教」というのは「仏の教え」であり「教え（教義・経典）」の伝来をもって仏教伝来と明言でき、それが立証できないかぎり仏教伝来はありえない。

さらに、邪馬台国の使者は魏に朝貢しているが、仏像を銅鏡の図柄に配するものは魏の領域から発見されていない。したがって、邪馬台国の使者が仏教の文物を魏から招来した可能性はかなり低いと思われる。なお、この当時のわが国の中国渡航は韓半島西部である。楽浪、帯方郡などを含め百済（伯済）など馬韓地域から経由したことを考慮しなければならなく、仏獣鏡の制作自体に諸問題がある。[19]

以上の点から、邪馬台国の頃に仏教が伝来したとは考え難い。では、倭の五王の頃はどうであろうか。そのころの中国では、単独の仏像が出現する。そして、前秦の符堅は近隣諸国へ仏教の斡旋をしており、高句麗（三七二）や百済（三八四）へはその時に仏教が伝播したと考えられる。その後、後秦の姚興王は亀茲国出身である鳩摩羅什に『妙法蓮華経』『阿弥陀経』等を翻訳させ活発に仏法を興隆している。ただし、韓半島への仏教伝来について5世紀以前の仏教遺跡が韓国内では発見されていないことが問題であろう。[20]

また、当時の我が国は百済経由で南朝に朝貢しているが、この頃、少なくとも中国南朝へ赴いた倭の五王の使者ならびに韓

半島へ行き来した日本人や渡来人が仏の教えである「経典」と出会っていたと考えられよう。そして当時のわが国の文化理解の能力についても、稲荷山古墳出土の鉄剣の金石文に見られるように、自国内の地方文書においても漢字を使用しているので、邪馬台国の頃より仏教の理解度は向上していたことがうかがえる。

このように、わが国では倭の五王の頃、仏教が伝来した可能性を井上氏の考察に加えて指摘したい。八幡神である応神天皇以降の四世紀後半から五世紀において、日本人が「仏教」という世界宗教を受容する可能性が高いことは明らかに考えられる。

二、豊国の渡来人と応神天皇

宇佐における原始神道は、韓国神と習合し、さらに仏教や道教と習合して形成されていったことが一般に論じられる。すなわち、その神道の思想の形成過程においては、まず菟佐津彦命を祖神とし、御許山馬城峰の磐座信仰を行っていたところに、韓国（辛国）神が渡来してきたのである。ところで、この韓国神を崇敬していた渡来系氏族が秦氏や勝氏であることは、『正倉院文書』大宝二年条の戸籍に記載されている北九州、つまり「筑豊」地域の居住者の半数以上が秦氏や勝氏であったことからも明らかである。[21] すると、宇佐神宮神職家の一つである秦系勝氏の辛島氏の存在が注目される。

秦氏は、『新撰姓氏録』や『日本書紀』にその由来が記されている。『新撰姓氏録』では、「左京諸蕃上」に記載されており、秦氏の祖先である融通王（弓月王）については、秦の始皇帝の子孫であると記されている。『日本書紀』の応神天皇十四年条には、秦氏は中国から百済、加羅（伽耶）諸国に渡来して、日本に渡ってきたと記述している。そこから、秦氏の移動を考えると「中国」―「百済」―「加羅（辛・韓・伽耶）」―「任那」―「九州」の順で移動し、九州へ上陸したことになる。中国から百済への移住は漢代の楽浪郡、帯方郡設置による漢民族の移動と推測でき、かつ、中国の混乱を避けて移住してくる中国人は、漢字や絹の文化を百済や加羅の人に伝えたのであろう。そして、四世紀半ばに楽浪、帯方郡が崩壊した時、そこに定住

していた漢民族が応神天皇期に日本に移住したと考えられる。秦氏や東西漢氏の日本への渡来の記事は、そのような実態を大まかに伝えているのではなかろうか。また、同じく『日本書紀』の新羅に拒まれ、加羅に留まった記事からは、百済や新羅の侵攻に追われた馬韓や加羅諸国の難民及び漢民族の難民が日本に移住したということが、近年の韓半島の考古資料の目覚ましい発見によって推測でき、[22]そこから、難民的状況の渡来人を受け入れた当時の天皇は、彼らが称賛することは然るべきであり、八幡神の応神付与の原因の根拠の一つと考えることもできる。その後は、『新撰姓氏録』に「大鷦鷯天皇（諡仁徳）御世、以百廿七縣秦氏、分置諸郡」とあるように、秦氏は全国各地に分かれて移住した。その一部分が『隋書』巻八十一「列伝」倭国条の「至竹斯國又東至秦王国其人同華夏以爲夷州疑不能明也。」に記される「秦王国」に住んだと考えられよう。当時の畿内と九州の交通は瀬戸内海の船が主であるので、ここから周防、豊国地域は九州と畿内への船の経由地として重要な拠点となっていたことがわかるであろう。このような記述に従って筑豊地域の秦氏や勝氏の信仰神を考えると、秦氏及び勝氏の出身に関して百済系渡来人であった可能性を指摘する。

ところが、『豊前風土記』に記載される「昔者、新羅国神、自度到来」という逸文、および『辛島氏系図』「素盞嗚命帥御子五十猛神降到於新羅国之時、多将樹種而下、然不殖韓地、盡以時帰、遂始自筑紫、凡大八洲国之内莫不播殖而成青山焉」には「新羅國」と記述している。この記述から、中野氏は「辛島氏は韓国神を云々する点で香春神を祀る秦氏の支配下にあった新羅系帰化人であろう」と推測し、宇佐仏教の紹介者は新羅系辛島氏であり、また宇佐仏教自体が新羅仏教であることも明らかであると述べている。[23]また、達氏は「八幡神は朝鮮の神、就中新羅神に源を発していることは疑う余地もない」と述べ、新羅系渡来集団の東進と彼らが秦氏及び秦系諸族であったことを『正倉院文書』大宝二年条の戸籍を紹介して、筑豊地域の秦氏等が新羅系渡来人としている。[24]そして、田村氏も「辛島氏」が新羅系渡来人であることに対して疑いを持たれていない。[25]つまり三氏とも新羅系渡来神の筑豊への進行であることを論じていることに問題がある。

しかし、これらの新羅系渡来人による八幡神興起説は、秦氏や秦系諸族の渡来の経緯についての実状を具体的に論じられて

いないため、「秦氏」がすべて新羅系渡来人であるかどうか実際のところ分からない。なぜならば、近年は秦系諸氏が新羅人であるといいきれないという説が論じられた[26]。また、秦氏が新羅出身ではないならば、百済から渡来したこと可能性がないことを検討した研究はあまり見られず、豊国と百済の関係についてもほとんど論じられていない。八幡神が新羅の神であると証明するためには、百済の神との相違を検討する必要があるが、未だ百済と新羅の民族信仰や祭祀、および言語の相違も明確ではなく、百済からの渡来を否定できる根拠を論じることがない。

そして、古代のわが国では百済と比較して考えても、新羅に対しては反抗意識が強くある。それにもかかわらず、当時の日本人が新羅の神に敬意を表すのであろうか。応神朝は新羅征伐し、継体朝には逆賊者である筑紫の磐井と結び、わが国の韓半島進行を妨げたのである。このような当時の新羅とわが国の関係からすると、やはり八幡神が新羅の渡来神として祀られ、応神天皇と習合したとは理解し難いのである。

また、田村氏は北部九州の渡来人について「渡来系百済人は畿内とその近国に集中しており、北部九州では、加羅・新羅系が多かった」と述べている[27]。しかし、その根拠としている資料自体を検討して論じておらず、その立証は難しい。しかも、近年では北部九州と畿内では百済系土器の出土があり、北陸には新羅系の土器の出土が多数報告されている[28]。そうなれば、田村氏等の北九州の新羅系渡来人説は成立しないであろう。

加えて、倭の五王が活躍した畿内の河内地方は、百済系渡来人が大量に移住し、「陶邑」はその代表的な集落である。三輪山と陶邑の大田田根子の関係はよく知られるところである[29]。三輪の祭祀に陶邑が関与する点について考えると、陶邑と百済伽耶系渡来人の関係を合わせれば三輪と渡来人との結び付きを推測することができる。また、三輪と宇佐地方との関係について逵氏は、宇佐の「大神比義」の関連について考察し、応神天皇の八幡神付与を指摘している[30]。

このように現在の段階では史料不足のために立証は難しいが、今後、わが国が百済仏教の伝来を考察し、どのように八幡神が百済仏教と結びついていたかどうかも具体的に検討すべきであると考えている。つまり筑豊の秦氏系諸族は百済、伽耶系渡

来人と考えられないか。さらに豊国の渡来人一族であろう「豊国法師」と仏教伝来の推進者「蘇我氏」との関係にも百済仏教の影響はどのようなものか。次にこれらの問題点を考察しよう。

三、豊国と蘇我氏

豊国地域は古代において大陸と畿内を結ぶルートの中継地点として栄えた。当時の豊国と大和政権の関係を示す記事が『新撰姓氏録』和泉国神別天神の条「巫部連」の記事である。

雄略天皇御躰不予、因茲召上筑豊国奇巫

これから「筑豊国奇巫」が雄略天皇の時期に活躍していたことは信じがたいが、豊国と大和政権との何らかの関係はあることは推測でき、「奇巫」という記述から渡来人による韓半島の巫覡信仰をうかがわせる。

次に豊国と大和政権との関係の記述は、『日本書紀』用明天皇二年（五八七）七月条の「豊国法師」である。

是日天皇得病還入於宮。群臣侍焉。天皇詔群臣曰。朕思欲帰三宝。卿等議之。群臣入朝而議。物部守屋大連与中臣勝海連。違詔議曰。何背國神敬他神也。由来不識若斯事矣。蘇我馬子宿禰大臣曰。可随詔而奉助。詎生異計。於是皇弟皇子（皇弟皇子者穴穂部皇子。即天皇庶弟）引豊国法師闕名也。入於内裏。物部守屋大連睨大怒。

この記述は用明天皇の仏教公認による蘇我、物部両氏の対立の状況と用明天皇が蘇我馬子の勧めで豊国法師を参内させ、仏教に帰依せしめるという内容である。この記述だけでは、豊国法師と蘇我氏との関係は明確ではない。ただし、五～六世紀の百済では仏教と巫覡信仰が融合されており、[31] 先述の「奇巫」という記述と合せて考えても、その状態で日本に伝来していたことはあり得るだろう。そして医療と信仰を含めて、蘇我馬子が百済系の渡来人である豊国法師を宮中に呼び、同時に豊国から畿内に百済の仏教思想が導入されたと考えられる。ただし、豊国法師については百済僧豊国という説もあり、豊国の出身では

ない可能性があることが問題であろう。[32]

ところで、仏教受容の推進者であった蘇我氏は葛城氏、巨勢氏と共に神功皇后や応神天皇の功臣である武内宿禰を祖とする氏族である。この蘇我氏と八幡神については、各地の八幡神社に蘇我氏の祖である武内宿禰が祀られていることで両者の密接な関係性をうかがわせる。このことから三韓征伐物語と八幡神の応神天皇付与との結び付きを推察することはできないだろうか。八幡神成立に関わった中央政権の氏族として蘇我氏が考えられ、蘇我氏と渡来人との親交を検討すると東漢氏や秦氏との関係が知られており、[33]百済へ外交的に干渉していた記述が多いことから豊国の渡来人と蘇我氏との関係を考えなければならない。そこで、はじめに『日本書紀』の蘇我氏と百済の関係の記述を探ると、欽明天皇十三年十月条仏教伝来の記事であるが、むしろ、蘇我氏と百済の関係について、次の欽明天皇十六年二月条の記述に注目する。

俄而蘇我臣問訊曰。聖王妙達天道地理。名流四表八方意謂永保安寧。―中略―蘇我卿曰。昔在天皇大泊瀬之世。汝國爲高麗所逼。危甚累卵。於天皇命神祇伯。敬受策於神祇。祝者遷託神語報曰。屈請建邦之神。往救將亡之主。必當國家謐靖。人物乂安。由是請神往救。所以社稷安寧。原夫建邦神者。天地割判之代。草木言語之時。自天降來造立國家之神也。頃聞汝國輟而不祀。方今悛悔前過。脩理神宮奉祭神靈。國可昌盛。汝當莫忘。

これは、蘇我稲目が新羅との戦いで急死した聖明王の件を告げに来日した百済の王子に対し、王位継承の危機に際して、国家の安寧と聖明王を悼んで、神祇を祀り、国家祭祀の重要性を勧めた記事である。この記載については幾つか議論されている。[34]けれども、近年、百済王室で神祇祭祀が行われていた可能性が明確になってきた。[35]また、平林章仁氏により蘇我氏が仏教のみならず伝統的な神祇祭祀にも深く関わっていたことが指摘されたことからも、[36]特に蘇我氏の外交関係とその宗教を考察する必要が生じてきている。

この欽明、敏達朝は百済の泗沘時代（扶余）であり、わが国と百済の親交篤き時代である。百済と中央との交流関係は蘇我氏を仲立ちとしている点が多い。敏達達天皇六年十一月には、百済国から、経論若干、律師、禅師、比丘尼、咒禁師、造仏工、

造寺工が来日している。ここで豊国と畿内との関係では、初期の宇佐の虚空蔵寺や法鏡寺の遺跡が百済系法隆寺式伽藍であることが注目される。[37] また、敏達天皇十三年九月には、百済より弥勒石像一体が伝わっている。これが畿内に至る過程は、先述の『隋書』に記されるように北九州より豊国、瀬戸内の海路で伝わったことが考えられる。

以上から、今後は飛鳥時代の豊国と蘇我氏、もしくは北部九州の氏族と大和政権との関係についての検討が課題となろう。

おわりに

応神天皇から雄略天皇在位と考えられる四、五世紀から欽明天皇在位の六世紀まで約二百年の間において、わが国が良好な外交関係を結んでいたのは、主に百済と中国南朝であった。そのため豊国の渡来人が畿内より早くその大陸文化と接し、そして百済において神仏習合していた宗教を豊国の渡来人と関係した蘇我氏が中央政権に伝来させたのであろう。ようするに、百済からの仏教伝来とともに八幡神が興起したと考えている。韓国土着の神が中国伝来の仏教や道教を受容し、さらにその韓国神が宇佐の土着の神と結びつき、習合に習合を重ねて豊国で成立し、その後に畿内と豊国の関係において応神天皇と習合した神となったのであろう。このように考察してくると、八幡神は八世紀初頭に単発的に成立したのではなく、段階的に成立した神なのではなかろうか。

けれども、未だ渡来人が宇佐にどのように仏教を伝えたかはわからない。どういった仏教経典の思想と習合し、わが国に伝来したかも明らかではない。仏教が日本に伝来し、日本の神とどのように結び付いたかという問題を研究する上において、豊国への仏教伝来と八幡神の出現の起因は未だ明確ではない問題が多くある。今後はこれらの諸問題を検証していく必要があるだろう。

【付記】

本小論の校正中であったが、二〇〇七年十月に韓国・國立扶餘文化財研究所によって、忠清南道扶餘郡の王興寺跡発掘調査報告があり、木塔跡から青銅舎利函が出土した。その銘文に、「丁酉年二月十五日　百濟　王昌爲亡王　子立刹本舎　利二枚葬時　神化爲三」と刻まれていた。佛舎利と「神化」、を同時に示すことは神仏習合の状態ではないだろうか。昌王（威徳王）は蘇我氏が「建邦の神」の奉祀を勧めた時期の王である。また、「二月十五日」は釈迦涅槃の日であり、百済仏教が涅槃経の仏教思想であることを窺わせる。この発見によって、一層深く、わが国の神仏習合について百済との関連から興起したという可能性が高くなった。八幡神と百済との関係を含め、今後の研究課題として特記したい。

注記

（1）磐座や神籬などを神体として、社を建立していない祭祀信仰の状態を本論では原始神道とする。

（2）全国で一番多く祀られている神は、八幡神であることも確かである（文部科学省21世紀プログラム、国学院大学「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」『現在神社の信仰分布』岡田荘司・加瀬直弥編集、國學院大學21世紀ＣＯＥプログラム研究センター発行）そのためか、八幡神についての論文は枚挙に切りがない。八幡信仰の研究の経緯は本澤雅史氏が「八幡信仰」『神道史研究』第五〇巻三・四合併号、平成一四年七月、神道史学会編で述べられているが、さらに研究が進んでいるので、他分野に亘る八幡研究史の研究調査の必要である。

（3）西田長男『神道史の研究・第二』第一部「宇佐八幡宮成立の周遍」理想社・昭和三二年。

（4）中野幡能『八幡信仰史の研究』吉川弘文館・昭和四四年、十六頁、及び一一四頁。

（5）田村円澄「宇佐八幡と道教」『日本古代国家と宗教』井上薫退官記念会編、吉川弘文館・一九八〇年。『筑紫と飛鳥』六興出版・一九九〇年参照。

（6）逵日出典『八幡宮寺成立史の研究』続群書類従完成会、平成十四年。最近では『八幡神と神仏習合』講談社現代新書・二〇〇七年に纏めている。

(7) 高橋庄次「遣新羅使歌の百済系の歌主と八幡神」(上・下)『上代文学』六六号・六七号、上代文学会・一九九一年。

(8) 青龍宗二「日本古代仏教史の諸問題—特に豊国仏教を中心として—」『駒沢大学仏教学部研究紀要』四一号、駒沢大学・昭和五八年。

(9) 大和岩雄『秦氏の研究』大和書房・一九九三年、一二七頁。

(10) 菅原信海「九州における神仏習合」『日本仏教と神祇信仰』春秋社・二〇〇七年、一一三頁。

(11) 飯沼賢司「八幡神成立史序論」『大分県地方史』第一四六号・平成四年で指摘され、八幡神について八世紀という律令国家が確立されてゆく、政治の中で生まれた神と考えられているが、それについても宗教思想からの視点から不自然に感じる。この点について今後考察したい。

(12) 宮地直一『八幡宮の研究』「二、八幡信仰の由来」理想社・昭和三一年。中野、前掲書、注(4)『八幡信仰史の研究』「第二章、応神八幡宮の成立」第一節。逵、前掲書、注(6)『八幡宮寺成立史の研究』「第二編、八幡神の成立」第二章参照。

(13) 竹内理三編『古代の日本、1要説』「仏教の浸透」角川書店・一九六四年、二一〇頁。

(14) 道端良秀『中国仏教史全集』第一巻第一章、書苑・昭和六〇年参照。

(15) 田村円澄『筑紫の古代史』学生社・一九九二年、三十七〜四十頁、及び同氏『筑紫と飛鳥』六興出版・一九九〇年、一三四〜一三九頁参照。田村氏は『日本仏教史』4巻・百済・新羅第一章所収「漢訳仏教圏の仏教伝来」法蔵館・昭和五八年において「私宅仏教」と「伽藍仏教」に区分され、「仏教伝来」については、基本的に国家(王室や皇室)に容認されたことが公伝として定義している。下出積與史は『日本古代の仏教と神祇』吉川弘文館・平成九年、二五頁に「私伝仏教」と「公伝仏教」とされ、仏教伝来について「その年次が六世紀前期を遡るものではない」と述べられている。

(16) 入澤崇氏は「揺銭樹仏像考」『密教図像一二』密教図像学会・一九九三年、四十四頁において「仏像が単独の礼拝像として存在する例は四世紀以前には皆無である」と断定されている。中国での仏像の起源は、水野清一『中国の仏教美術』平凡社・一九六六年。鎌田茂雄『中国仏教史』第二巻「受容期の仏教」東京大学出版会、一九九〇年。エーリク・チュルヒチャー『仏教の中国伝来』せりか書房・一九九五年を参照。釈道安の弥勒菩薩像(三七五〜三八七年)、もしくは同時期の無量寿仏像(三七五年)が文献から見る仏像の初見(『高僧伝』五巻、大正・50・三五一・中)である。龍谷大学仏教初伝南方之路調査班(代表執筆　木田知生)の『仏教初伝南方之路

文物図録』文物出版社、一九九三年の成果は神仏習合思想の新たな視点でもあろう。木田知生「江浙初期仏寺考—仏教初伝南方ルート研究序説—」『龍谷大学論集』四三九号、一九九一年。山田明爾「仏像伝来の古ルート・雲南と海と」『しにか』一九九二年・八月号。入澤崇「仏教初伝南方ルートの調査と研究」『龍谷大学仏教文化研究所所報』十六号、一九九二年参照。

(17) 入澤崇「仏と霊—江南出土仏飾魂瓶考」『龍谷大学論集』四四四号、龍谷大学・平成六年参照。

(18) 前掲書、注(13)二〇九頁。

(19) 王仲殊(尾形勇・杉本憲司編訳)『三角縁神獣鏡』学生社・一九九二年に魏と呉と比較して呉において鏡の製作が主であったことを論じている。三角縁神獣鏡については、白崎昭一郎『東アジアの古代文化』一〇一号、古代学研究所・一九九九年。西川寿勝「三角縁神獣鏡と魏皇帝の下賜鏡『東アジアの古代文化』一〇一号、古代学研究所・二〇〇一年・一二三頁図2。福永伸哉『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会・二〇〇五年。以上を参照。仏獣鏡についての論考や調査報告は、前掲書、注(16)の入澤論文や先述の王氏の前掲書、第二章・二「日本の三角縁仏獣鏡について」および関口渉氏「三角縁仏獣鏡を彫った石碑」『日本の石仏』日本石仏協会・二〇〇五年に記載されている以外に仏獣鏡自体の研究はあまり見られない。今後の研究課題としたい。

(20) 森浩一監修、東潮、田中俊明編『韓国の古代遺跡』中央公論社・昭和六十三年。田村円澄『古代朝鮮と日本仏教』吉川弘文館・昭和五十五年、一〇頁参照。現在のところ、韓国、公州市の「大通寺跡」が最古の寺院遺跡である。

(21) 半田康夫「秦氏とその神」『歴史地理』八二・三、昭和一三年参照。

(22) 森浩一他『古代日本と百済』大巧社・二〇〇三年、第一部「百済興亡と倭」参照。

(23) 前掲書、注(4)一六頁。

(24) 前掲書、注(6)『八幡宮寺成立史の研究』一二四頁。

(25) 前掲書、注(15)『筑紫の古代史』一三七頁。同氏、『古代東アジアの国家と仏教』吉川弘文館・二〇〇二年、Ⅱ部参照。

(26) 加藤謙吉『秦氏とその民』白水社・一九九八年参照。

(27) 田村円澄『宇佐八幡と古代神鏡の謎』戎光祥出版・二〇〇四年、八頁。『筑紫の古代史』学生社・一九九二年、三十七頁。

(28) 前掲書、注(22)『古代日本と百済』白井克也「土器からみた地域間交流」一二二頁〜一三五頁。及び、和田晴吾・吉井秀夫「日本出

土百済系土器をめぐる1考察」「北部九州の百済系土器…四、五世紀を中心に」『福岡大学総合研究所報』２４０号、福岡大学・二〇〇〇年参照。

(29)『日本書紀』崇神天皇七年条

(30)前掲書、注（6）『八幡宮寺成立史の研究』第二編、第二章参照。

(31)길기태（吉基泰）『百濟泗沘時代의佛教信仰研究』書景文化社、二〇〇六年。（韓国語出版）

(32)『本朝高僧伝』巻第六十九に百済の帰化僧の記述があり今後考察を要したい。

(33)加藤謙吉『秦氏とその民』白水社・一九九八年。平林章仁『蘇我氏の実像と葛城氏』白水社・一九九六年参照。

(34)日野昭氏は、「蘇我氏の純粋の神祇信仰に関する記述はほとんど皆無に近い」という見解を『南都仏教』十三号「蘇我氏の神祇について」昭和三十八年、一一〇頁に論じている。ところで、この『日本書紀』に記される蘇我氏が意見した「建邦之神」の祭祀問題については諸説があり、今後考察していきたい。

(35)前掲書、注(22)『古代日本と百済』二六八～二七六頁参照。一九九三年から韓国扶餘の陵山里寺遺跡の発掘による、所謂「百済木簡」の発見である。この仏教寺院跡の遺跡近くからおおくの民俗祭儀的呪術的な木簡が出土したことは、平川南氏「道祖神信仰の源流」『国立歴史民俗博物館歴史報告』一三三号・二〇〇六年に論じられている。百済において神仏習合の素地の要因があると判明でき、王が直接祭主となって「天」を祀る百済国家祭祀が見受けられる。武寧王陵と合わせて検討しても、わが国の宗教祭祀は百済と関係することは間違いないであろう。

(36)平林章仁『蘇我氏の実像と葛城氏』白水社・一九九六年参照。

(37)「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡―大分県宇佐市における古代寺院調査―」『大分県文化財調査報告二六』大分県教育委員会、一九七三年参照。